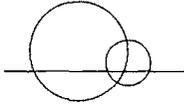


〈講演〉



東亜同文書院とそのあゆみ・大旅行

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

【司会】引き続きまして私共東亜同文書院大学記念センターの藤田センター長が、ご挨拶並びに、引き続き講演をいたします。皆さん方のお手元に「講師略歴」というプリントが配布されておりますが、私のほうから簡単にご紹介をさせていただきます。藤田センター長は文学部の教授であります。それから今ちょっと沙漠の植林というお話がありましたけれども、これは愛知大学が、鳥取大学の遠山先生の始められた日本沙漠緑化実践協会という組織に参加する形でやっております。藤田センター長はその第2代の会長でもあります。東亜同文書院の学生達が卒業時に行なった中国各地の調査、これは膨大な記録が残されておりますけれども、私共の大学でも初めてそれについて本格的な研究を始められたのが藤田センター長です。主な著作のところの「中国との出会い」第1巻から第4巻まで、それぞれ題が少しずつ変わっておりますけれども、これらは全て東亜同文書院大学の学生達が中国各地を調査旅行した、その記録をまとめられたものです。それから「東亜同文書院・中国大調査旅行の研究」という、これらを基礎にした研究をなさっております。以上簡単に紹介をさせていただきました。

【藤田】改めまして皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の藤田と申します。今日はいくつか立派な会場で我々の展示会ないし講演会を実施することになりまして大変嬉しく思っております。

また多くの方々にご参集いただきまして大変ありがたく思っております。併せて今回の講演会に関しましてはご当地の兵庫県と神戸市の教育委員会、あとで安井先生がご発表になりますが、安井先生が館長をやっておられます地元神戸の孫文記念館、それから読売新聞社の後援をいただいております。読売新聞社は我々の第1回目の横浜での展示・講演会以来たびたび後援をいただいております。今回の神戸は、全国での展示・講演の5回目です。本学当記念センターには孫文関係資料が書院卒業生からの寄贈により、大きなコレクションがあり、それを神戸の孫文記念館とのコラボレーションも計画し、その所蔵パネルをお借りし、併せて展示することができました。私共の愛知大学の孫文コレクションは後ほど武井ポストドクターからの紹介があります。

今日のテーマは「孫文—神戸、長崎そして東亜同文書院・愛知大学—」です。そのトップバッターとして「東亜同文書院とそのあゆみ・大旅行」というタイトルでお話をさせていただきます。私は専攻が地理学でありまして、あとでまたちょっとお話しするチャンスがあろうかと思いますが、ベルリンの壁の崩壊以前までは東西冷戦の最中でありまして、東亜同文書院というのは外地上海にあった日本の学校なんだから、何らかの形で植民地への先兵とかスパイ活動をやったんじゃないかと、とりわけ左翼系の方々からの批判がございまして、当時はなかなかそういう中で研究しましても評価されなかったのです。私は地理学の立場か



ら彼等が行なった膨大な調査旅行に出会いまして、現地でその記録内容の確認をしました。そしてこれならいけるということで研究を始めました。

そして例のベルリンの壁が崩壊したあと、それより前に私がすすめていた書院生による大旅行調査研究に対して、1990年代の前半とくにマスコミの方々が東亜同文書院に非常に関心を持っていただいて、その内容に非常に注目をしていただきました。NHKの特集番組作成と放映を始め各大手の新聞記者の方々から特集用記事の取材がありまして、大変ありがたいと言いますか、忙しいけど嬉しいということがございまして、改めて東亜同文書院がこの世の中で再評価されるというきっかけになりました。その後、今回のこのプロジェクトも文科省のほうに認めていただきまして、多くの助成金をいただき、我々の施設もさらに整備することができました。そしてこの機会を活かし、全国的のゆかりのある地へ出かけ、こういう形で講演会と展示会を開いてまいりまして、多くの方々に知っていただくことができました。とりわけ第1回目に開催した横浜は、他の催しとも一緒でしたが3日間で25,000人の方に入場していただき、こういう講演会も入場者があふれてしまうぐらいでした。東亜同文書院とはどんな学校だったんだろうと多くの方に関心を抱いていただき、大変ありがたく思っております。

ここでは最初に東亜同文書院の歩みを振り返りながら、そのあと私がこれまでやってきた大旅行の研究を通じての東亜同文書院の成果を、改めて皆さんにお伝えしたいと思います。これが最盛期の頃の、上海にありました書院の建物です。東亜同文書院は1901年に設立されます。最初は租界の中には建てないという原則がございまして、租界外に建てたんですが、ちょうど清国が滅びる少し前の混乱期でありまして、中国の清朝派と反清朝派の争いの中で戦火が校舎に及んで、2度までも焼けてしまいました。これは3度目のキャンパスで本格的なキャンパスです。今度はフランス租界

の一番西の外側、当時周囲は田んぼの景観でしたけれど、今行きますと都心です。スカイスクレイパーの建物が建ってるような一大中心地に変わっています。このキャンパスの建物は20年間ほど存在し、書院の最盛期つくりましたが、また第2次上海事変の時に中国兵により放火され焼失しまして、現在は残っていません。そのあとまだ歴史は続きますが、それはまた後でお話します。

創始者はどなたであるかと言うと3人のキーパーソンがございます(図1)。一番目のキーパーソンはこの写真の真中の荒尾精という方です。この方は今で言う愛知県、尾張藩の出身です。若くして創設間もない軍隊に入りまして、熊本鎮台に行った時に、あとで出てまいります岸田吟香が上海でヘボンに教えてもらった目薬を作って販売していた、ということがあり、中国に初めて入りました。それまでは日本人は漢詩漢文から描いた中国像、非常に美しいきれいな文化国というイメージがあったのですが、現地へ入ったらずいぶん違う。その実像に触れて中国をもっと勉強しよう、しっかり調査しようということで、その中で中国貿易というものの重要性を痛感するようになります。



図1 東亜同文書院の創設者たち

そして現地で集めた情報を、この右側の、仲間であり親友であった根津一、彼は書院の最初の院長になりますが、この方に編集をさせまして、『清国通商綜覧』という当時の中国の実状を初めて約2,000頁にわたって著した本を出します。日本人にとっては初めての中国像が描かれており、ベストセラーになって多くの人達に読まれたわけです。もうひとつ方、一番左が近衛篤磨で、貴族院議長を

やられたり、若い時にヨーロッパへ留学したりされている見識の豊かな方です。日清戦争の終了後日本の中では今までの欧米志向からアジア志向へ目を向けるグループがたくさん出てまいります。ずいぶん熱っぽいグループもありましたけれども、その中で教育と文化の交流が一番重要であるということで、東亜同文会という団体組織を立ち上げてその理事長になった方です。この方が東亜同文会を通じて東亜同文書院を生み出していく方針を出し、中国側と交渉します。その時に右のお2人の持っていた構想、これも過去の中国調査の中できちんとした貿易実務を担当できる人、当時の中国の貿易は清朝の時代でして、日本人の手に負える単純なものではありませんでした。したがって現地でトレーニングをし、中国語もマスターさせるという構想とドッキングしまして東亜同文書院が完成いたします。今風に言いますとビジネススクールの計画ということになるんじゃないかと思います。

これが書院の歴代の院長です。映像が暗くて分かりにくいかと思いますが、一番左上の根津院長から、左下は近衛文麿、例の東京裁判の直前に自殺をされた方ですね。近衛家の継承者です。実際愛知大学の理事も長いこと、近衛家が理事として入っています。今はお年を召したため名誉理事になってますけれども、愛知大学にも継承されております。それから右側は、大学に昇格してからの学長達です。一番右下、最後の本間院長（図2）、この方が引き継いで愛知大学を作られました。

ところで物語のスタートはこの岸田吟香。その息子さんが岸田劉生。「麗子像」という女の子の絵を描いた人ですが、そのお父さんですね。この方が美作の国、岡山県の山の中から幕末の江戸へ出てこられて、ずっと勉強をして目を悪くされた時に、明治維新直後で横浜に来ていたヘボンに出会いました。ローマ字の表記で有名な方です。その方は目医者で、目薬を作ったりもする方でしたから、岸田吟香はそれをマスターしながら同時に

日本語と英語の辞書作りをするために上海へ行って活字を利用。その途中で目薬を売ってお金をかなり儲けました。後に横浜へ戻って横浜日日新聞、日本で最初の日刊紙を創刊します。その門下生の中に「愛知大学」のロゴをデザインした高須という方がおられます。愛知大学のロゴマークとして利用されています。

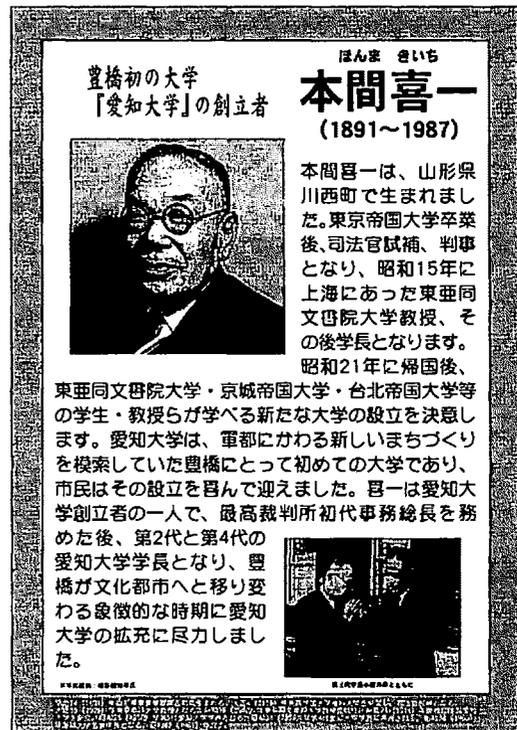


図2 最後の東亜同文書院大学学長本間喜一

私も最初の頃はこのあたりの事は訳が分かりませんでした。こんなに深みにはまってしまうとは思わなかったのです。最初のきっかけは書院の卒業生の会である滬友会に出入りしている最中に与えられたこの蘭州紀要です。情報がいろいろ書いてある。これは誰がどうやっていつ作ったんだろう、最初はさっぱり分かりませんでした。その中に記録された中国の地名の分布を広げてみますとこんな形になります。蘭州というのはちょうど真中のちょっと上のほうですね。西のほうの西域から華北・華中へと地名がずっと出てくるわけですし、これは明治の中期、10年代の作品ですけども、日本人がこういう広い範囲の地域情報を記載して

いたということですが。

先ほどの荒尾精が岸田吟香を追って中国へ入って、さらに漢口、揚子江の中流の中心地、そこへ行きまして本屋さんをやりながら中国情報を集め、そこで先ほどの『清国通商綜覧』という本を書いた。その時に地名を分布図で表わしますとこんなふうになります。中国中の地名を表しているということが分かります。その中にこれは銅の製品ですけど、中国ではこんな良い、日本にはあまりない銅製品もきちんとできる。こういうものは日中間の貿易で、お互いが利益を得ることができるんじゃないか。そのことが中国を経済的にベースアップすると言いますか、強めることができる。それによって列強がその時代の中国にどんどん入り込んでましたから、それに対する抵抗力を作ることができるんじゃないかという構想がありました。

そのあたりを一覧にまとめますとこんなふうになります。一番左上、荒尾精と根津一、この方々が最初に東亜同文書院を作る前、日清貿易研究所という学校をビジネススクールとして1890年に上海で立ち上げます。しかし5年後に日清戦争が始まりまして、引き揚げざるを得なくなり、やがて戦争後改めていろんな中国をめざした組織が日本国内にできあがってきますが、そのうちの東亜会と同文会が合体して東亜同文会に統合され、その会長に近衛篤磨がなる。そこでの主張は清国の保全と清国の自強の支援。具体的には先ほど言いましたような経済的な強化、それから教育。アジアをそういう形で保守・自立させ、日中を提携させる。そのための手法として教育文化事業に主力を置いたのです。

この東亜同文会が誕生して教育文化事業を始めるにあたりまして、まず東京同文書院というのをやって、日清戦争後中国から多くの留学生を迎え入れて教育をします。それから朝鮮、北および南に3つほど普通の学校あるいは大学校を作ります。そしてそのあと東亜同文書院を上海に作り、

やがて天津とか漢口にも中学校を作ります。そして戦争に入った頃いろんな工学系の学校を併合して、言わばこういう形での総合的な教育システムを作ってていったわけです(図3)。

〔東亜同文会経営諸学校〕



図3 東亜同文会経営の学校の広がり

中国では最初に南京同文書院を作るんですが、義和団の乱が迫りまして上海へ移る。そしてきちんとした形で1901年、東亜同文書院が誕生する。そして45年の敗戦と共に閉学しますが、翌年愛知大学を誕生させた。こういう経緯がございます。

愛知大学を作るにあたって、当時はGHQのコントロール下に置かれており、最後の院長本間は東亜同文書院大学という名前にしたかったんですけども、GHQは中国に関係した名称に関しては一切認めないということで、愛知大学という名前になりました。当時ありました中国研究所も国際問題研究所と名前を変えざるを得なかったわけです。

最初の東亜同文書院の科目はこういう科目でして、ちなみに右側を見ていただきますと、ほとんど商業簿記とかの商業関係ですね。それからもう1つは中国語が徹底的に多いことがお分かりになると思います(表1)。そういう点で戦後にスパイ学校と言われましたけれども、そういうことを思わせるようなものはありません。明らかにビジネススクールであります。

これが今から15年ほど前、当時書院の卒業生の

職名	氏名	就職年月日	担当科目
院長	根津 一	明治35. 5. 5	倫理
教授	法学士・上野 貞正	41. 4. 15	
同 助	法学士・福岡雄太郎	36. 10	法律、政治
同 助	法学士・田部 瑛	40. 12. 7	経済、財政
同 助	文学士・大村 敬一	40. 7. 28	制度、外交史、通商史
同 助	高業学士・森川一甫	38. 9. 9	高業学、簿記、商業實踐
同 助	高業学士・中川崎吉	39. 12. 1	高業学、簿記
同 助	市 権 知 足	40. 1. 21	英語
同 助	市 権 木 高	41. 12. 6	中国語
同 助	横 清 照 江	41. 4. 13	漢文、尺牘、時文
同 助	横 清 三 木 善	41. 3. 23	中国語
同 助	松 永 下 三 郎	40. 7. 28	中国語、制度
同 助	高 岡 幸 三 郎	40. 7. 28	中国語、高品学、商業地理
同 助	小 和 田 隆 吉	40. 3. 28	習字
同 助	神 津 助 太郎	41. 4. 27	
同 助	神 津 助 太郎	41. 1. 8	商業慣習
同 助	沈 文 藻(字、少坪)	39. 9. 2	尺牘
同 助	趙 煥(字、輝如)		中国語
同 助	趙 煥(字、介生)		中国語
同 助	趙 煥(字、建勳)		中国語
同 助	ミセス・フ ィ ン プ	40. 10. 22	英語
同 助	ミセス・ハ ー プ	41. 1. 14	英語
同 助	安 河 内 弘	35. 10	
同 助	佐 藤 昌 平	41. 5. 1	
同 助	田 中 永 次 郎	41. 5. 1	
同 助	品 川 賢 彦	40. 5. 23	
同 助	小 山 田 隆 吉		
同 助	安 河 内 弘		

(『東亜同文書院大学史』より)

表1 初期の東亜同文書院のスタッフと担当科目(1908年)

人達がまだ1,400人以上おられました。そこでアンケートをした結果であります、右のほうと左のほう、県費生だけの時代と後に私費生も加わった時代とで卒業生の出身地の分布に違いがあります(図4)。最初、根津院長は、より有能な学生を集めるということで、県費生としての推薦で2人ずつ、授業料および生活費を県のお金で出してほしいという要請をし、これが各県で認められます。

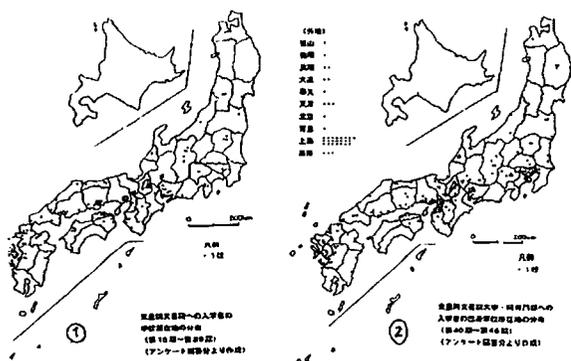


図4 書院入学生の出身府県別分布

当時日清戦争の後でしたから、それぞれ各県も、これを機会に中国と交渉できる人材を自分の県で養成できたらいいなという思いもあったと思うんです。そこでお金が無い県は1人しか送れなかったという事情もありますけれども、それに応じて各県で試験により選抜された2人ずつが入ってき

たわけです。最初の年は合計70人ぐらいです。各県2人枠の合格ですからなかなか狭くて激戦であります。希望者が多いものですから後半になりますと、私費生も認めるということで、右側ですが今度は東京とか大阪とか名古屋とか、大都市の人達がたくさん入るようになりました。これも30人ぐらいの定員に対して3,000人ぐらいの受験者がありましたので、なかなか合格するのも大変だったと思います。それだけ優れた人を取ろうという募集方式は成功したということになります。

入学した時の夢と言いますか、先ほどのアンケートをまとめますと、「骨を埋めたい」とか、「アジアのために努力したい」とか、「中国人のために」とか、中国との関わりを持ちたいという答えが非常に多いことが分かります。

ではこういう学校からどんな方が育ったのか。今回山田良政という方を特に取り上げますけれども、この方と次の純三郎という方が、孫文と最も関係が深い。そこで今回安井先生にお願いしまして、孫文の記念館とドッキングしまして、展示会のほうでは1つのコーナーに展示品を出させてもらうことになりました。そのきっかけを作りましたのがこの山田良政、先ほど学長が言われましたように学長と同じ津軽の出身の方です。この方が南京同文書院、上海の東亜同文書院の先生兼、当時は小さい学校でしたから事務職の仕事もやりながら、孫文に惹かれていって、孫文の命令で一斉蜂起した時に惠州というところへ参加して戦死をするわけです。このことで孫文に大変尊敬されました。山田良政とその弟の純三郎です(図5)。この左側が弟さんの山田純三郎。これは有名な写真でいろんなところで使われますが、我々のセンターのほうにも純三郎のご子息の順造さんという方が、純三郎さんが実際孫文の秘書役をやるようになって膨大な資料が集まったのを、愛知大学へ寄贈していただいたということがございます。そういうようなことで純三郎という方が孫文とより密接な関係を持っていたことが分かります。



図5 孫文と山田純三郎（左）

その他経済界のほうでは白岩龍平という方がいます。この方は少し前の日清貿易研究所の卒業生です。いろんなことをされた方で、とりわけ中国揚子江流域の航路を開発し、日清汽船を設立し、主に運輸業を中心に成功されまして、東亜同文会の役員として活躍されました。土井さんという方も同じ頃の人ですけれども、上海で初めて大手の企業とは別に個人で商社を開いて、いろいろな日本企業が中国で活躍の場を求めるきっかけを作り出した方です。こういう方はもっと広く知られていいと思いますが、中国で日本人が活躍した状況は戦後ほとんど無視されておりましたので、改めて現代の日中関係を考える上で再評価していくべきだと思います。

これは林出賢次郎さんという方です（図6）。後で申しますが西域の調査を3年越しに徒歩で行ない、シルクロード沿いの調査をして帰ってこられました。外務省に入りまして、例の満州帝国ができた時に皇帝溥儀の秘書役になった方です。通

訳もやりました。しかし軍部から見ると溥儀の味方ばかりしているということで首を切られてしまいました。戦後は宗教家になられた。これはその時の写真です。この方は大倉邦彦という方です。この方は佐賀県出身で大倉洋紙という、紙の販売を手がけた方で、後に東洋大学の学長になりました。中山優という方はお名前を聞いたことがあろうかと思いますが、東亜同文書院の卒業生で、実際は寮で勉強ばかりしていて出席が足りなくて修了生だったということです。しかしその後朝日新聞とか外務省に入られて、一時満州建国大学の教授になられた。そのお隣は清水董三さんという方ですが、書院の中国語の先生でありまして、後に外務省に入って、日中関係に活躍した方であり



図6 林出賢次郎 26歳

明治40年（1907年）4月、第1回新疆旅行を終え北京滞在中

今度は外交関係ですが、あまりにも有名な方は書院で言いますと石射猪太郎という方があります（図7）。この方は吉林の総領事をされた後、上海の総領事、後に外務省東亜局長になった方です。軍部が中国へどんどん侵出しようという時に、平和的な手段でもって、しかも中国を尊重する形で交渉すべきであるという正論でもって最後まで軍部と対立した方です。「外交官の一生」という回顧録を出版されておりますし、それを見ますと正義感というものが伝わってきて、一

種の書院魂というものが見えます。この写真の文面を見ますと石射猪太郎の東亜局長就任を祝って同窓会の方々が集ってお祝いした時の写真だとわかります。ちょうど前列から2段目の真中におられる方です。

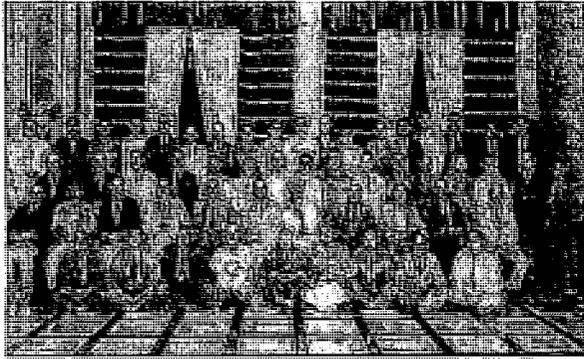


図7 石射猪太郎を歓迎する東亜同文書院同窓会

2列目中央が石射猪太郎（1887～1954年）。石射は同文書院5期生。書院生は商業などビジネス界だけではなく、領事館や新聞社、満鉄などへも広く活躍の場を求めた。写真は上海総領事として赴任した石射を歓迎する東亜同文書院同窓会。1932年。

次は宗方小太郎という方です。いろいろ活躍された方で、東亜同文書院およびその前の日清貿易研究所等の設立を陰で支えた方です。中国調査も単身で駆けずり回って調査された方です。いろいろな職務を持っておられるのでちょっとお話する時間がございませんが、その隣の田中徹雄という方、山梨県出身の方ですが、軍に入って日中戦争下に平和交渉的な戦陣を成功させたということで、戦いを好まず平和的に問題を解決した方です。戦後は山梨県の副知事になっておられます。

いろいろな方がおられて、ここでは写真の部分からだけ抜き出したものですから、「あいつがないじゃないか」みたいなことがあるかと思いますが、その辺はお許しいただきたいと思います。

ところで、途中で中華学生部というのができまして、外国語以外は日本人の学生と一緒に机を並べて授業を受けます。その卒業生の中で一番向こうにおられる方はなかなかハンサムな方ですけれども、この方は戦後復旦大学の教授になら

れた方です。真中の梅電龍という方は本当によく勉強された方です。しかし勉強する一方で地下工作もやっていました。それなりに戦後は評価されたんですけども、文革の時に殺されてしまいました。一番右の沙文漢という人はそんなに書院で勉強された方ではないようですが、党の幹部になった方です。これは水谷尚子さんという方の当センターの年報収録分を引用させていただきましたんですけど、それ以外にも多くの方々が書院の中華学生部の卒業後中国の時代の変化の中で活躍されています。

文化面でも活躍された方が多いですが、この方は大城立裕さん、沖縄の作家、沖縄県出身の書院卒業生です。沖縄県に行った時の写真です。一番右は琉球大学の先生です。芥川賞受賞の後、非常にたくさんの作品を書かれています。そういうわけでいろんな方面で活躍をされています。

実は実業界がやっぱり一番多いので、ここは逐一名前を挙げませんが、商社で活躍された人数です。これは卒業生名簿から作らせていただきました。三井とか三菱、住友、大倉で就業した書院卒業生の人数です。これは戦前の段階ですね。皆さんおなじみの名前だと思いますが、たくさんの卒業生が活躍され、戦後もその世界で活躍され、日本の高度経済成長を支えていたということがよく分かります。これは海運関係です。たくさんの方が活躍しておられます。これは報道、ジャーナリズムの分野ですが、大きく書いてあるのは中国本土、あるいは満州関係でこういう新聞を運営されて編集長になった人達ですね。戦前から日本の中の新聞各社でも多くの方が活躍しておられます。

それから外交官の分野ですが、先ほどの林出さんを始め多くの方が活躍され、特に中国各地の領事館では多くの方が活躍されました。一番右の奥のほうに本日ここにご出席の小崎先生の名がございます。小崎先生は書院の卒業生であり、また愛知大学の第1期の卒業生でもあります。現在87歳でなおご健在です。

学界ですが、だいたい80人ぐらいの卒業生が大学の教授になっておられます。その中で私が専攻している地理学の先生も何人かございます。

こういった方々のベースを作ったのは実は大旅行でございまして、最初の頃はお金が無くて修学旅行でありました。それが日英同盟の結果、イギリス側から「ロシアの勢力が新疆へ入ってきているようだ。調べてほしい」という要請を外務省が受けました。しかし、当時日本政府はそんな情報網を持っていませんでしたから、上海の東亜同文書院の根津院長に頼んだのです。根津院長はそこで第2期の5人の卒業生、1902年に入学した卒業生の中から5人を選んで2年間に及ぶ西域調査を頼んだのです。この写真の一番上に矢印がありますが、この矢印の人物が細かな日記を記録した波多野養作です。夏は日中は暑くて動けないので夜に旅をしたなどがそれです。その旅行の日記のいろんな情報を手がかりに私のほうで作図することができます。土地利用とかいろんな外国人の進出情報です。これが外国人分布図です（図8）。西域の奥のほうへ行きますとやはりこんな形の土地利用図を作成できます（図9）。こうして当時の聖域、シルクロード沿いの状況が分かります。

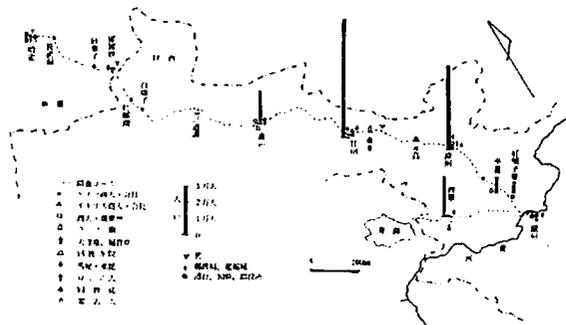


図8 波多野養作の踏査コースと地域情報の分布図（蘭州から哈密、1905年）（波多野養作の日記より作成）

この方は卒業してからは中国でいろいろ仕事に就いておられたわけですが、ちょうど40歳になった頃、軍部が日中戦争を始めた時に自殺してしまいます。自分達が一生懸命やってきた対中国関係の発展を全部壊してしまうと。娘さんにお会いし

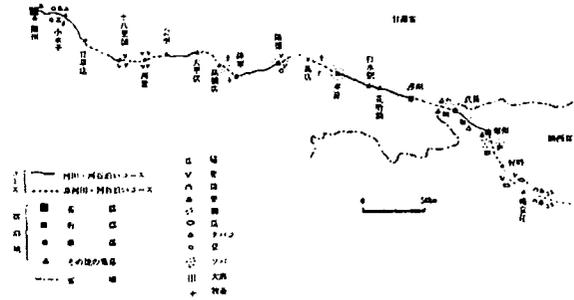


図9 波多野養作の踏査コースと宿泊地および農地利用（西安～蘭州、1905年）（波多野養作の日記より作成）

た時に、ピストルで自殺したんだけど、その直前に「軍部の馬鹿野郎」と大声で叫んで亡くなったというお話をお聞きました。

これは5人の各コースです。5つのコースですが、これは林出賢次郎さんのコースですね。一番左上の新疆ウイグルの天山山脈の遥か北、ソ連との国境まで歩いて行ってます。ところが帰国後、当時のモンゴルの王様から招待状が来まして、また新疆奥地へ出かけていったのです。

そしてそのことが機縁になって書院生がこういう「大旅行」を制度的に行なえるようになったのです。外務省から5人に対する謝礼が書院に届き、それを基金にできたからです。これは出発風景です。まるでアフリカ探検隊のような格好ですね。5月の終わりに書院をスタートしまして約3か月から5か月、ほとんど歩きです。中国中を歩き回って、調査報告が卒論なんですね。日記は後輩のためにということで書かれるようになりました。

コースもいろいろありました。これはその一例でコースを線で示してあります（図10）。こんなふうに目的の調査地へ行くために遠回りをしてあっちこち見て旅をしたのが分かります。これは避暑地の地図ですけど外国人が住んでいたところ。歩幅で距離を計って地図を作ったのです。当時の中国は地図がありませんでしたから自分達で計測し作図したのです。これは潼関での写真ですね。函谷関。ずいぶん荒れていたと書いてあります。

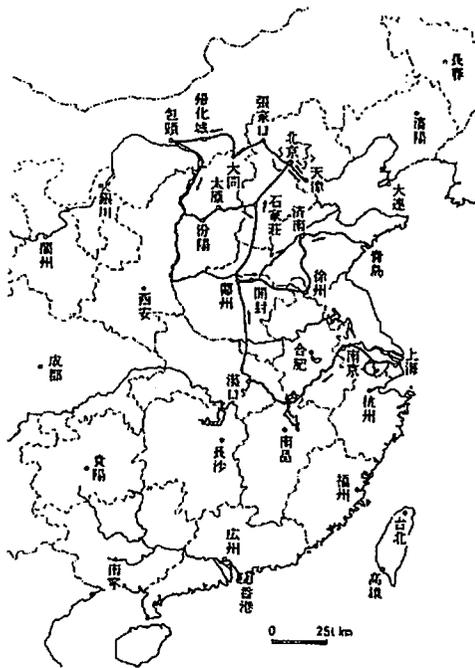


図10 山西陝西黄河流域調査班旅行コース

ところで軍閥と言うと何となく大泥棒の親分みたいなイメージですが、実際はインテリで、ほとんど日本へ留学していた人達です。そういう人達を書院の学生達は訪ね、会って揮毫をもらっています。揚子江を筏で下ったり。一番下の写真は日本人は戦後ほとんど行ってませんが、黄河中流のデルタ地帯にあたるユートピア三角州であります。これもキリスト教徒の宣教師が開拓した土地なんですね。

今度は東南アジアですね。ずいぶんあっちこっち行っています。陸路、あるいは海路、植民地がほとんどでした。その中で日本人がすでに各地に入り、さまざまな仕事をし、それぞれが地元民から信頼され、活躍していたことが浮かび上がってきます。細かい説明をしたいんですけどちょっと時間がございませんので次へ行きます。

昭和6年(1931年)満州事変が起こりまして2年間は中国政府もさすがに書院生にビザを出しませんでした。そこで書院生達は予定を変更せざるを得なくなって、2年間満州での調査旅行に入ります。その結果満州各地の情報が収集されました。

先ほどご紹介いただきましたけれども、私は書院生による調査旅行記録を出版してしまっていて、今最後の第5巻目「満州」の編集をすすめています。

では、旅行コースの中でどういう地域にどういう関心を持っていたかということです。最初の頃はやっぱり商業あるいは経済活動が中心でした。それが次第に文化、教育とか歴史とか他の分野にも広がって、総合的に中国研究に進んでいきます。それがやがて大学へ昇格するというようになっていくと思います。しかし日中戦争が始まり、戦局が厳しくなると旅行コースが狭まって、これなんかそんな中で唯一四川まで出かけていますけれど、一般的にはなかなか難しかったと思います。さらに戦局が厳しくなるとより限定された日本軍の占領地域内に限定されていきます。しかし各地のコースは全部で700コース。これは世界でも類を見ない最大級の大調査旅行であります。記録の中には風聞は一切書いてはいけぬ、観察したり確認できたことだけ書くのが原則いうことだったので、きちんとした記録になっています。

コースをどういうふうに決定したか。これは学生諸君の自由意志で実施されたことが分かります。書院生のアンケートによりますと、書院生の大旅行に対する期待は非常に強かった。その後の人生への影響が非常に大きかったということですね。人生を振り返った満足度。非常に満足しているという方が多い。書院精神というのはいったい何であったかというキーワードを聞きました。書院教育のあり方が非常に評価されております。

しかし、戦後先ほど申しましたように書院に対していろいろな批判がありまして、数日前に安藤彦太郎先生が亡くなられたと聞きましたけれども、この安藤先生は早稲田の先生で、その著書である新書版の中で書院の存在そのものを植民地支配の先兵養成の学校だと批判的に示し、これが広がってしまって書院に対する研究が空白になってしまったことがあります。細かいことはちょっと省かせていただきますが、これも書院卒業生は書



院から大変多くのもので得ている。中国の理解ができた。書院がスパイ視されたことについてはとんでもないことだ、とする反論がほとんどを占めております。卒業後は内地で就職した人もいます。外資で多くの書院卒業生が就職しております。先ほどのような職種で多くの方が中国で活躍されたことが分かります。

これはよく講演会でお話するんですけど、私イギリスにいる時に、このような講演をしまして予告で「グレート・エクスカージョン」を発表しますよと示した時に、当日会場に行ったらこの「グレート」がなかったんですね。よく聞くと日本人にそんな「グレート」な「エクスカージョン」ができるわけない。イギリス人こそ本家の探検をしてきたのだというわけですね。しかし発表を聞いた後やっぱり「グレート」だったと担当した教授が私にお詫びに来たことがあります。イギリス人にとっても書院の「大旅行」はきわめてスケールの大きい大旅行であったということが分かります。

中国研究を書院がどんな形でしたのかということですが、一番上に先ほど申しました『日清貿易通商綜覧』それから西域旅行の成功、それにとまなう調査旅行が制度化されていって、ビジネススクールから語学の実用教育、フィールドワークによる中国、東南アジア調査記録、それをふまえた『支那経済全書』、『省別全誌』などいろんな作品が出され、こういう形で中国研究が総合化されていったことが分かります。

そのうち『支那経済全書』、これは書院の学生の調査記録の文書をそのまま、全12巻にして出版したものです。20,000頁に及びます。その後の調査旅行記録の集大成が全18巻出版された『支那省別全誌』、支那省別の地誌ですね。これは20年後にもう1回企画されましたが、戦争のために第9巻で終わってしまいます。内容的には大きな進歩のあとが見られます。これは近衛文麿院長が巻頭言で書いている、総合的な調査をやったんだということが書いてあります。その他雑誌、いわゆる

ジャーナルですね。時局を反映した内容がけっこう多いですが、当初は「支那」のタイトルですが、やがて名前が「支那研究」というアカデミックなタイトルに変わり、最後は大学に昇格しますと「東亜研究」というような形になります。

それを私が研究した成果が先ほど紹介されました『東亜同文書院調査大旅行記録』シリーズです。これらの原文は非常に読みにくい手書きです。なかなか読みにくくて苦労しました。書院の卒業生の方にも教えていただきました。私がこれらの手書き原稿に出会った時に、本当にきちんと書かれてあるのかどうかと、私はこのコースで10日間、日記を持ち歩いて確認しました。その結果きちんとできていることが分かりました。

そこでこういう成果をどういうふうに見ていくかということです。これは3つのコースを奥のほうの山西省と四川省を中心にちょっと融合させてみると次のようになります。いろんなことがそこで分かってきます。情報を組み合わせますと当時の様子を復元できます。これは道路が安全であるかないかとか、土地利用がどうであるかとかいうことです。こんな図がいっぱいできますよということだけちょっとお見せします。

これは通貨ですね。12期生の時、各地へ行った時の通貨が全部書いてありました。当時、中国は統一貨幣がありませんでしたから地方地方で通貨が異なります。それらの間に見られる共通貨幣を取り出しますと、こういうふうに通貨の経済圏が描けます。中国の伝統的な経済圏がここに示されます。今度は言葉です。言語。これも非常に多様でした。これも同じように共通言語をえぐり出します(図11)。こんな形になります。これが伝統的な文化圏と言えるでしょう。そして貨幣圏と言語圏の2つを重ねますと文化と経済が統合された1つの生活経済圏が浮かび上がります。これは今の中国を見る上でも非常に重要だと思います。ここから中国の基礎構造が分かるからです。

これは阿片がどこで栽培されていたかを示した

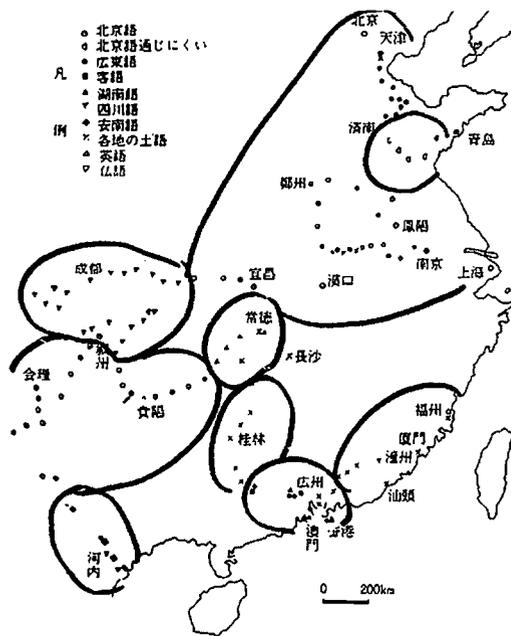


図11 第12期生の各コースの記録から示される言語の分布

ものです。北西部の乾燥地帯に集中しています。これは強盗団の分布を示したものです。省の境目で彼らが出没しています。本当は黄河の氾濫で財産を失った農民達が強盗団になったというのが最初のきっかけです。いろいろ日本側が中国に無理難題を押しつけた時期がいくつかありまして、反日運動がありました。これは日清汽船の会社建物が焼かれた時の写真です。これは黄河のもっと奥のほうで、そこでも排日・排英・排外運動がありました。こういう図も各地の調査旅行の記録から作成できる分布図です。初めてのナショナリズムが日本の手によって中国の中に芽生えたことが分かります。こういうのが背景で毛沢東が登場したり、その前に蒋介石が登場できるようになったきっかけになったんじゃないかなと思います。次は軍閥の勢力圏ですね。これは四川省での近代化された都市の分布図です。パブリックなスペースは中国の人は不得意ですけど、軍閥の人が日本へ留学してそういうものを公園とか図書館とかを作り出していったことがわかります。つまり軍閥の段階で中国の近代化が最初にスタートしていたということが分かります。

これは金融機関です。時間がなくなりましたのでこのあたりはちょっとカットしましょう。次は満州移民のケースです。中国の人達が山東省を中心に満州へ渡る。どういう職種の人達が渡っていたか。ほとんど無職の人達ですね。その港からどこへ行ったのかというデータも作り出すことができます。満州での彼らの広がりも分かってきます。

これはまとめの図です。右のほうは1930年代の中国で資本主義経済が少し定着しています。最近資本主義が復活した中で見ますと、やっぱりベースとしては1930年代、いろいろ伝統的な基盤につながっていますので両者をドッキングさせるために1930年代以降の空白域を埋めると言いますと、書院の人達が作り出した農村を含めた調査がそのベースになっているだろうと思います。それだけ書院生の調査記録に価値があると言えます。

戦後それが愛知大学の設立に引き継がれました。これが愛知大学を設立した最後の院長の本間さんです。展示がありますのでご覧になってください。したがって、愛知大学には東亜同文書院大学の展開が表れています。中国から返還された書院時代の語彙カードをベースとして『中日大辞典』が作成出版されたのもその例です。その後、愛知大学が行なったいろんな事業について中日新聞など地元の新聞や日経新聞が取り上げてくれるようになりました。これは90年代に愛知大学を取り上げました日本経済新聞の特集記事であります。左側は「中日大辞典」の記事、次いで「大旅行」というようにマスコミの取材により、特集記事になったのです。

というようなことで、時間が無くなってしまい、ちょっと簡単になってしまいました。最近では欧米研究者の人達も書院に関心を持っていただいています。東亜同文書院というのは歴史的にもグローバルな知名度を持った学校だったんだということをお我々は改めて確認しています。最近では愛知大学だけの書院ではなくて、多くの研究者、世界の研究者の人達に充分研究をしていただきたいと思

います。多くの書院に関するストックを持っていますが、本学だけのものではなく、もっと広く研究対象にも、あるいは認識の対象にもしていただけたらありがたいなということでもあります。ちょっと時間がオーバーしましたが、以上で終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます

した。

【司会】 何か事実関係についてのご質問がありましたら、お1人だけお受けしたいと思います。いかがでしょうか…。特にないようですので、どうも藤田先生ありがとうございました。

《講師略歴》

藤田佳久

1940年 愛知県豊橋市生まれ。

1965年 名古屋大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程。

1969年 奈良大学専任講師、助教授。

1979年 愛知大学助教授、教授、現在に至る。理学博士。

現職：愛知大学東亜同文書院大学記念センター長、日本沙漠緑化実践協会会長。

専攻：地理学。

主な研究分野：東亜同文書院と中国研究、ほか地域研究。

主な著作：『日本の山村』（地人書房）、『中国との出会い－東亜同文書院調査旅行記録－、第1巻』、『中国を歩く－同第2巻－』、『中国を越えて－同第3巻－』、『中国を記録する－同第4巻』、『東亜同文書院・中国大調査旅行の研究』（以上大明堂）。